

「社会学的記述」再考

前田 泰樹

I 問題の所在

エスノメソドロジー (Ethnomethodology, 以下 EM) は、「人びとの方法論」とそれについての研究の双方に与えられた名前である [Garfinkel 1967]。EM は、社会学の理論や方法論になじみのよい問いを、人びとの実践の方へと差し戻しつつ、思考を重ねてきた。たとえば、人びとの行為をどのように記述すべきか、といった問いは、実践に参加している人びとにとっての問題でもある。であるならば、そこに何らかの方法があるはずだ、と考えるところから始めることができる [前田2008]。そして、本特集の中心的な概念である「文脈」についても、同様に考えることができる。EM は、どのように「文脈」について思考するのか。これが本稿において、最後に答えられるべき問いであるが、暫定的に、次のように答えておこう。すなわち、文脈を編成することや、文脈から外れることは、その実践に参加する人たちにとっての問題でもある、と答えておきたい。本稿の課題は、それが実際のところどのようなことなのか、を示すことにある。本稿では、まず、人びとの行為をどのように記述していくべきか、という問題について、簡単に再考したあと、記述と文脈の関係を明らかにすることによって、この課題に答えていきたい。

H・ガーフィンケルとともに EM を始めた H・サックスは、最初の公刊された論文「社会学的記述」[Sacks 1963/1990] において、次のように、この問題を提起している。たとえば、社会学の古典である E・デュルケムの『自殺論』においては、自殺率を社会的要因から説明する研究がなされている。そのためには、「自殺」を病死や、事故死、他殺と区別して数え上げることができなくてはならない。研究を遂行するためには、あらかじめ定義してしまう、というやり方もあるだろう。しかし、「自殺」という言葉は、私たちもふだんから使っている自然言語の概念である。だとしたら、定義を行うことによって問題を解消する方針では、「社会生活の科学」には、たどり着かないのではないか。むしろ、私たちが「自殺」という概念のもとで分類を行う手続きそれ自体を記述すべきなのではないか。サックスによる問題提起は、だいたい以上のようなものだ。

たしかに、私たちは、「自殺」を「病死」や「事故死」といった他の死に方と区別して理解している。たとえば、治療を受ければ助かったかもしれない人が、ぎりぎりまで病院に行こうとせず、亡くなられたとき、「病死した」と記述するか、「自殺した」と記述するかでは、まったく違うことをしていることになる⁽¹⁾。「病死した」と記述される場合、病いがその人の意志によらず降りかかるものである以上は、まずその「原因」が問われるだろうが、「自殺した」と記述される場合、その人がなぜ当の行為をなすにいたったのか、その「理由」の方が強く問われるだろう。こうした理由を問う空間において当の行為を記述するとき、当人の想いの強さに「慨嘆」したり、周囲の人たちが放っておいたことを「非難」したり、といったことがなされている可能性がある。逆に、理由を問うことをさげたい場合には、私たちはこうした記述をさけることもあるだろう。「自殺した」という記述を用いる人も、避ける人も、その記述が他の死に方の記述と区別して用いられることを、あらかじめ知っている。だからこそ、どのように記述すべきか、ということ自体

が、私たちの実践の争点になることがある。「自殺」という概念を定義するところから始める方針では、こうした実践の詳細は、とりのがされてしまうことになる。

それに対し、「自殺」という概念のもとで分類を行う手続きそれ自体を記述するべきではないか、というサックスの問題提起は、次の方針にまとめられている。「私たちが主題として取り上げたものは、それがなんであれ記述されなければならない。なんであれ、それ自身がすでに記述されているのでなければ、私たちの記述装置の一部となることはありえない」[Sacks 1963/1990: 85]。たしかに、私たちは、さまざまな概念を用いて人びとの行為を理解している。だとするならば、そこで用いられている手続きそれ自体を、つまり、私たちが日常的に用いている概念の用法を記述していくことから始められるはずである。では、どのようにしたら、そうした作業が可能になるだろうか。ここでは、サックス自身の古典的な分析を確認するところから出発したい[Sacks 1972]。

サックスは、「赤ちゃんが泣いたの、ママがだっこしたの」という「子どもが語った物語」について、次のように、分析している⁽²⁾。私たちは、この2つの文からなる物語を聞くとき、この「ママ」は、泣いたその「赤ちゃん」の「ママ」であると聞くだろう。また、文が並んでいる順序に出来事が起きていて、最初の出来事があったから次の出来事があったのだと聞くだろう。だが、それはいかにしてなのか。「赤ちゃん」と「ママ」が並置されるとき、私たちは、両者を同じ「家族」という集合にふくまれるカテゴリーと理解する。「泣く」という活動は、人生段階上の「赤ちゃん」と結びついて聞こえるはずだ（大人が泣いたのであれば、さらに男性／女性が泣いたと見ることもできるが、「赤ちゃん」が泣いたのであれば、さらに「男性／女性」が泣いたとはみないだろう）。そして、「泣く」という行為は、次に続く行為を規範的に指定する働きをもつ。したがって、「だっこする」という行為は、なされるべき行為としてなされたと聞こえることになる。

こうしたサックスの分析が示しているのは、私たちがありふれた日常の光景を理解するときにさえ、さまざまな概念どうしの結びつきが用いられているということである。そもそも、事実として「赤ちゃん」が「男性」であり、「ママ」が「女性」であったとしても、私たちは、「男性が泣いているのを女性が抱きあげた」とは、見ないはずである。「赤ちゃんが泣いたのをママがだっこした」ことが「見てわかる」といったごく基本的な経験であっても、さまざまな概念の結びつきが用いられることにおいて経験されているのであり、その結びつきの規範的な期待のもとで編成されたものなのである。そして、この物語を語った子どもは、こうした概念の用法を理解していたはずだ。それだけでなく、サックスが強調しているように、私たちは、この赤ちゃんがどの赤ちゃんなのかを具体的に調べなくても、この物語が、「可能な記述」として理解できてしまう。つまり、これらの2つの記述間の関係のもとで、日常の光景を理解することができるし、少なくともそこから始めるしかないという意味では、この「可能な記述」のもとでしか、理解できないだろう。そうであるならば、このありふれた日常の光景を理解することは、個別的な経験であったとしても、その個別的な経験を可能にする「方法」は、秩序だった仕方で繰り返し使えるものでなければならない。

なお、ここでは「赤ちゃんが泣いた」という実際に語られた物語の中で用いられている記述の分析からはじめたが、この「可能な記述」が記述するような出来事を、私たちは、さまざまな仕方で「見たり」「気づいたり」「観察したり」「見抜いたり」することがあるだろう [Coulter and

Parsons 1991〕⁽³⁾。それらのなかには、「物語を語る」場合とは異なり、「赤ちゃんが泣いた」と明示的な形で定式化されることのない場合もあるはずだ。なにより、「赤ちゃんが泣いている」のを見て「だっこ」した「ママ」は、「赤ちゃんが泣いた」と発話することをしなくても、「だっこする」ことによって、「赤ちゃんが泣いている」という「可能な記述」のもとでの理解を示しているとも考えることもできる。他方で、「赤ちゃんが泣いた」と明示的な形で定式化がなされる場合には、単に事実を正確に記述する、という以上のことがなされている場合もある。サックス自身が述べているように、「赤ちゃんが泣いた」というのは、トラブルの報告でありうる。トラブルの報告は、そのトラブルを気にするべき人にとって有用である可能性がある。したがって、トラブルの報告は、しばしば、そうでなければ話しかけることの難しい関係の人に対して話しかけるためのチケットとして用いられることがある〔Sacks 1972〕。実際に「赤ちゃんが泣いた」と発話することは、ある状況においては、トラブルを報告することであり、報告が可能になるような関係を打ち立てることであるかもしれない。

ここまでくると、結局のところ、人びとの行為をどのように記述するべきか、という問いに答えるためには、その行為がなされた「状況」や「文脈」を考慮する必要がある、ということになるだろう。ただし、あらかじめ述べておけば、それは「状況」や「文脈」によって、行為の意味を説明する、という考え方とは、だいぶ違った作業を要求することになる。「赤ちゃんが泣いた」という発話は、そこで進行中の状況そのものを記述し、状況を作り出す指し手でもあるだろう。「赤ちゃんが泣いた」が「トラブルの報告」という活動として適切なものとされるのは一定の文脈の中においてであるが、他方、この文脈が成し遂げられるのは、「トラブルを報告する」という活動が適切になされているからである。ある記述がそれ自体、それが記述する状況や文脈の構成要素でありうるわけだ。ここでは、こうした考え方を、記述とそれがなされた状況や文脈とが、相互反映的（リフレクシブ）な関係にあると、呼んでおくことにしよう〔Garfinkel 1967；Garfinkel and Sacks 1970；Lynch 1993 (2012), 2000〕⁽⁴⁾。注意しておきたいのは、「相互反映性」のような述語が、何か決定的な説明の解になるわけではない、ということだ。こうした相互反映性は、記述とそれがなされた場面との理解可能性を支えるものであるが、M・リンチが強調しているように、それは、どのような記述と場面との関係においても成り立っているものでもあり、相互反映的でないような事例を想定できるような述語ではない〔Lynch 2000〕。したがって、「相互反映的である／ない」といったような区別を導入することもできない。こうした述語は、分析が上手くなされるのであれば、使う必要がなくなっていくものである。本稿でも、具体的な例示によって、この関係を想起させることが目指されるにすぎない。

以上、多少早足になったが、いったん基本的な考え方の確認に区切りをつけ、本稿の課題を再設定しておこう。実際のところ、記述とそれがなされた文脈との関係を、どのようなものとして理解することができるか、2節以下では、この問いに答えていきたい。2節では、C・ギアツが『文化の解釈学』〔Geertz 1973/1993 (1987)〕で引用したことにより有名になったG・ライルの概念である「厚い記述」について再考し、「厚い記述」と「薄い記述」の区別が相対的なものであることを示す。その上で、病棟の管理室（ナースステーション）での看護師たちの実践の事例を分析することによって、複数の記述が可能な場合の、複数の文脈を提示する方法を例証したい。続けて、3節では、I・ハッキングが『魂を書き換える』〔Hacking 1995 (1998)〕という著作でとりあげた、新しい概念のもとでなされる過去の遡及的記述の問題について再考する。その上で、

遺伝性疾患を生きる当事者たちの語りの事例を分析することによって、複数の記述が並置されうる場合に、その文脈を特定していくための方法を例証する。これらの作業を通して、EM は、どのように「文脈」について思考するのか、明らかにしたい。

II 「厚い記述」再考

前節でみた「社会学的記述」において提起された問題は、サックスが強調していたように、フィールドに赴くエスノグラファーにとっての問題でもある。実際にエスノグラファーたちは、日々のフィールドノーツをつける作業の段階から、人びとの行為をどのように記述すべきか、という問題につきあたらざるをえない。サックスは、1964年秋から1965年春になされた講義 [Sacks 1992: 26] において、当時のエスノグラフィー的研究の再生の基盤のひとつとして、L・ウィトゲンシュタインの名前と『青色本・茶色本』『哲学探究』の存在をあげている⁽⁵⁾。哲学者たちに日常言語への関心をもたらした問題群は、エスノグラファーたちに哲学書を読むように促した。2節では、日常言語学派哲学由来の概念として、エスノグラフィーの方法論へ強い影響を与えた「厚い記述」という概念について再考するところから始めたい。

「厚い記述」は、ギアツが『文化の解釈学』に採録された論考「厚い記述」で引用したことにより有名になった、ライルの概念である [Ryle 1971a/2009a, 1971b/2009b; Geertz 1973/1993]。「右目のまぶたを素早く収縮させている」2人の少年は、1人はたんに「意図せずにまぶたをひきつらせまばたきしている」だけなのだが、もう1人は、「友人への悪だくみの合図としてウィンクをしている」。それを見た3人目の少年は、その不器用なウィンクを、わざと「こっけいに真似をしてみせる」 [Ryle 1971b/2009b: 494-7; Geertz 1973/1993: 6-7]。ギアツは、ライルの例を引きながら、エスノグラフィーの目的は、「薄い記述」と「厚い記述」の間にある、と主張している [Geertz 1973/1993: 7]。つまり、「右目のまぶたを素早く収縮させている」という薄い記述と、「お人よしをだまして悪だくみがあると考えさせるためにウィンクをしてみせる友人のまねをして茶化している」という厚い記述には、「意味の構造のヒエラルキー」があるのであり、エスノグラフィーの目的は、それを分析することにあるのである。注意しておきたいのは、ここでは、単に「厚い記述をするべきだ」、とのみ主張されているわけではない、ということである。この点は、むしろ、ライル自身の論考に遡ってみると、よりクリアになる。

そこで挙げられているのは、ゴルフのアプローチショットの練習や、役者のリハーサルの例である [Ryle 1971a/2009a: 489]。アプローチショットの練習は、それが「練習」である以上、試合でアプローチショットをする可能性があることを想定している。試合でのアプローチショットに上達がみられないなら、練習してきたことは無駄になるかもしれない。もちろん、それが「練習」である以上、具体的な試合の状況からは、相対的に切り離されているだろう。アプローチショットの練習は、実際の試合と違って、好きなところでできる。グリーンの上でなくてもできるし、もっと極端には、ボールとクラブがなくても、できるかもしれない。役者のリハーサルも同様だ。役者が、当日の朝、台詞や身振りを完璧に仕上げようとしてリハーサルをしているのは、本当に演じているわけではない。ただ、彼は、その夜のパフォーマンスのために、リハーサルしているのであって、そこで、口ごもったりつまずいたりしたら、そのリハーサルは無駄になるかもしれない。そして、リハーサルは、自分の部屋でも、観客がいなくてもできる。その意味で状況から切

り離されている。けれど、彼が行っていることを「厚い記述」のもとで理解しようとするとき、そのリハーサルが何のためになされているのか、つまり、その日の劇場でのパフォーマンスについて参照しなければならない。その劇場でのパフォーマンスが実際になされるのは、特定の状況においてなのである。

また、ライルは、他の行為の準備としてなされる行為を挙げている。たとえば、「歌を歌う準備として咳払いをする」という例である [Ryle 1971a/2009a : 490]。この場合、「咳払い」という行為に対してなされうる厚い記述は、「歌を歌う準備として咳払いする」というふうに「歌を歌う」ことへの参照を行っている。「歌を歌おうとしている」という偽りの印象を与えるために、「咳払いする」こともできるかもしれない。この「咳払い」は、「咳払いするふりをしている」のではなく、「歌を歌う準備として咳払いしているふりをしている」のである。「ふりをしている」と記述するためには、「歌を歌う」ことへの参照を含んだ「厚い記述」がなされているのでなければならない。このように「歌を歌う準備として咳払いする」という厚い記述の下で理解するとき、その厚い記述は一定の状況を含み込んで理解されていることになる。そう考えてよいのであれば、ここでライルが試みているのは、行為の理解の問題を、記述間の関係の問題として扱うことであり、それぞれの記述を支える文脈間の問題として扱うことだとみなすことができる。

ライルが挙げた別の例を見てみよう。ライルは、定理を証明しようとするユークリッドや、戦争を終わらせようとする政治家の例をあげている [Ryle 1971b/2009b : 509-10]。ユークリッドが新しい定理を証明しようとしていることは、彼がすでに行った証明を学生に教えようとしていることよりも、より高度なことかもしれない。けれど、「最も薄い記述においては」、彼がしていることは、「わずかな幾何学の語や句を、ひとり呟いている」ということであるかもしれない。ここで注意しておきたいのは、薄い記述がなされているところに、厚い記述を帰属させることができる、ということである。政治家は、自らの7文字の名前を平和条約に署名することのみを行い、それ以外に別のことをしなかったとしても、それによって戦争を終わらせることができる。「戦争を終わらせる」という厚い記述は、「名前を署名する」という薄い記述との関係のもとで、相対的に「厚い」記述と理解することができる。相対的に「厚い」記述には、その記述を支える相対的に「厚い」文脈が必要なのである。

こうした薄い記述と厚い記述との関係について、(マンチェスター学派と呼ばれることもある) エスノメソドロジストの W・シャロックと B・アンダーソンは、それが相対的なコントラストを与えるものであることを強調している [Sharrock and Anderson 1991:169]。ここでの論点は、社会学の一部において伝統的に述べられてきた「行動」と「行為」の区別と重ね合わされて理解されることを回避することにある。つまり、一方に、行動(=薄い記述)をおき、他方に、行為(=厚い記述)をおいた上で、その差を意図によって説明するような考えかたとみなされてはならない、ということである。それに対して、社会的行為の記述の「厚さ」を社会的な編成の問題として理解することを推奨している [Sharrock and Anderson 1991 : 170]。ここでは、行為の理解の問題を、(外から観察可能な)行動と(内面の)意図との関係ではなく、「薄い／厚い」記述同士の関係の問題として扱っていることを確認しておきたい。

この論点は、EM が、「人々の方法論」とそれについての研究につけられた名前であること [Garfinkel 1967] を想起するとき、重みを持ってくる。つまり、記述の「厚さ／薄さ」という区別自体が、実践において生じる現象でもあることを、思い起しておく必要がある。たとえば、シャ

ロックが、分業にもとづくワークの研究において述べているように、エンジニアたちは、自分自身のワークについて「厚い」理解を持つとうとする傾向がある。つまり、エンジニアたちは、分業における自分のパートのみを理解する「薄い」理解ではなく、他の人々が何をしなければいけないかを理解し、分業のプロジェクトの中に自分のパートを位置づけて「厚い」理解を持つとうとしている、ということだ [Sharrock 2011]。

また、そのように考えるならば、実践に参加する人たちは、記述の厚さと薄さを区別するために、「方法」だけでなく「方法論」を持っている、ということにも注目しておく必要がある [Lynch 2001a (2001)]。この論点は、医療や看護に携わる人たちといわゆる「植物状態患者」との交流を詳細に描いた研究 [西村2001] のなかに、際立ったかたちで見取ることができる。この研究に登場する看護師の Aさんは、ある患者さんとのかかわりにおいて、コミュニケーションの手段が「確立できていない」と言いつつも、反射に間違われてしまいそうな微妙なまばたきや握手を通じて交流している。このとき「まばたき」を反射としてではなく、「返事をした」とみるのであれば、それは「厚い記述」のもとでの理解と考えてよいだろう。もちろん、Aさんは、そのつど迷い悩むこともあるわけだが、それは「返事を受けている(かそうでないか)」について迷っているものであり、ここには、適切な厚さの記述を行っていくための「方法論」がある。

なお、この病院におけるエピソードの一つとして、「返事」と「反射」の区別をするために、ビデオテープに録画された「まぶた」の動きの速度や回数を数える研究がなされていたことが、紹介されている。そこに明確な差はみられなかったということだ。これは、ギアツが述べていたように、「ウィンク」と「まばたき」の違いは、カメラのような「現象論的」観察ではとらえられない、ということなのだろうか [Geertz 1973/1993: 7]。もちろん、カメラ自体は、人の行為を理解しない、ということは正しいだろう。しかし、安価なテープレコーダーやビデオカメラが普及した結果として、録音／録画機材をフィールドワークにおいて用いることが珍しくなくなった現在、ここには、少し丁寧に考えておくべき問題があるように思う。シャロックらが強調しているように、テープレコーダーやビデオが「それ自体で」行為を適切に捉えられるわけではない、ということが意味しているのは、そうした録音や録画は、それが記録していることがらに対して人々が日常的にとっている態度と結びついて用いられている、ということにすぎない [Sharrock and Anderson 1991: 170-171]。つまり、明らかにすべき点は、録音や録画が記録するものを理解するさいに用いることのできる「方法」の方にあるのだ。

人類学者と社会学者の共著として出版されたビデオ撮影のための入門書には、こうした事情が丁寧に述べられている。「まぶたの動き」のあとでニヤリと笑うといった特別な活動が見られるなら、それが「悪巧みの合図」であると記述することもできるようになる。「まぶたの動き」をどのように理解するかは、その実践に参加する人々にとっても課題であるし、参加者たちはその理解を示すこともある。これらの具体的なやりとりがビデオの中でなされているのであれば、それを分析することは可能である [南出・秋谷2013]⁽⁶⁾。逆に、そうしたやりとりがなされている状況から切り離して、「まぶた」の動きのみに注目していくとき、状況や文脈と結びついた記述の下での行為の理解可能性は失われてしまうだろう。「まぶた」の動きの速度や回数を数える研究が抱えていた困難は、それが「薄い」記述であることによるのではなく、記述とそれがなされる文脈とを切り離してしまうことによっているのだ、と考えることができる。そしてそうだとするならば、問題は、ふたたび記述と文脈の関係をどのように考えることができるかに、帰着する

ことになる。

以上の議論を受けて、具体的な事例を用いて、記述と文脈の関係を例証することを試みたい。まず、ビデオに録画された、ある病院の循環器・呼吸器病棟でなされた2人の看護師による会話の断片を見てみよう⁽⁷⁾。

【断片1】

- 01 [12]: [34] さん、【[34] さんの方に移動しながら声をかける】
02 [12]: 鍵をかしてくださ::い。【[34] さんの斜め後ろに立つ】
03 [34]: あ、は::い 【半身を [12] さんに向けて、鍵をポケットから出して確認する】
04 [12]: すいません
05 [34]: お願いします 【取り出した鍵を [12] さんに渡す】
06 [12]: ありがと::

この会話において、まず、[12] さんから、「鍵をかしてください」という「依頼」がなされて、それに対し [34] さんが「応答」していることがわかる。それをうけて、実際に鍵の受け渡しが行なわれ、[12] さんが、「ありがと::」と「感謝」を示して、この会話は終了している。ここで注意しておきたいのは、「依頼」→「応答」という行為の連鎖の下での記述と、「鍵をかりる」という記述は、相互に矛盾しない、ということである。むしろ、「依頼」のような薄い記述ができるところに、「鍵をかりる」といった相対的に厚い記述を帰属させることができる。

次に、この会話がなされる前後の状況をもう少し見てみよう。病棟の看護師たちは、AとBの2つのチームにわかれて働いている。[34] さんは、この日、Bチームのリーダーであった。このとき [34] さんは、管理室（ナースステーション）の中央のテーブルに早くから座っており、12時半から開始されるカンファレンスに備えているところだった。管理室のテーブルには、次第に看護師たちが集まってきている。そして、12時半の少し前に、[12] さんは、病室から管理室に帰ってきた。そして、壁時計を見上げて時間を確認しつつ、[34] さんの方へ移動し、断片1のようなやりとりを行った。ここで、[12] さんの依頼に答えて、[34] さんは鍵を渡している。受け取った [12] さんは、鍵をかけてある金庫から薬をだし、病室へと向かう準備をしていた。

金庫から出された薬は、「デュロテップパッチ」という緩和ケアのさいに痛みを抑えるために用いるオピオイド製剤（麻薬）である。そのつど、使用量と使用者を確認しつつ、オピオイド製剤の管理が行なわれており、Bチームのリーダーが金庫の鍵を管理している。このとき [12] さんは、管理室にもどってきて、投薬の準備をして、また病室へと赴いていく。他方で、[34] さんは、管理室でのカンファレンスに備えながら、病室でなされる投薬へ向けての管理にも携わる。[12] さんは、移動しながら、[34] さんの斜め後ろで立ち止まるのに対し、[34] さんは、テーブルの椅子にすわったまま、半身を斜め後ろの [12] さんの方に向けて対応し、鍵を渡し終わると、すぐに元の向きに戻り、ふたたびカンファレンスに備えていた⁽⁸⁾。管理室は、病室へと赴く看護師たちの活動を協調させる「協調のセンター」[サッチマン1994] となっているが、とくにリーダー看護師は、部屋持ちの看護師のワークの協調に関わっている。こうした協調が、1人の看護師が、病棟組織を代表するものとして、1人の患者に向きあうことを可能にしている。ここでなされた鍵の受け渡しは、「緩和ケアにおける投薬治療の準備」でもあるのだ。

次に、病棟全体の時間の編成という観点から、この日の午前中のフィールドノーツを中心に、断片1にいたる経緯についても、簡単に述べておこう。「デュロテップパッチ」を貼り替える予定になっていたのは、Bさんという高齢の女性の患者で、肺がんによる疼痛をコントロールする目的で入院していた。Bさんは、この日の早朝に強い痛みを訴え、レスキュー（嘔用の鎮痛剤）が用いられていた。また、そのことが、朝の申し送りにおいても、語られていた。申し送りが終わると、9時頃から、看護師たちは、それぞれ担当の病室に赴き、検温や薬の配布を行っていく。この日、Bさんのケアを担当したのは、緩和ケア委員でもある[12]さんであった。[12]さんは、Bさんの病室から管理室にもどったさいに、管理室にいた医師に「Bさんのデュロテップパッチ、10時に変更していいですか」と依頼し、肯定的な返事を得た上で、Aチームのリーダーに報告していた。ここでは、「デュロテップパッチを貼る時間を10時に変更する」という行為が、医師の指示とリーダーの把握のもとになされている。このとき、変更先の「10時」の方が、本来もとの時間であり、この日実際に、デュロテップパッチを使用した「12時半」の方が、「10時」からずれているということに、注意しておきたい。基本的に、種々の交換の時間が10時なのだが、Bさんの場合1回10時に貼ったものを、はがしてすててあったため、12時半にやりなおした、という経緯がある。

この日は、処置が一段落して、「何もやることがない」という発話が聞かれ始めた11時ころ、[12]さんと[29]さんが、興味深い会話をしていた。[12]さんは、「今日90分後に私の処置があります」と述べていた。「私の処置」というのは、他の処置が終わりつつあるのに、もう一つ「私の処置」があることをマークしているのである。そして、この「90分後」というのが、デュロテップパッチを貼る時間なのだ。続けて、[12]さんは、タイマーをかけたことを伝える。それに対し、[29]さんも、「80分後にかけておく」と応じている。つまり、[29]さんは、10分前にあわせて自分のタイマーをかけているのである。ここで用いられているのは、Bさんにデュロテップパッチを12時30分に貼るという情報を、注意を向けておくべきものとしてマークした上で、共有する方法なのだ。そして、この「12時30分」という時間は、昼のカンファレンスの始まる時間でもある。つまり、対応すべき[12]さんの時間の流れは、他の看護師たち全体の時間の流れからもずれており、だからこそ、注意を向けておくべきものとしてマークされているのだ。実際に、この日も「12時30分」が近づいてくるにつれ、昼のカンファレンスの開始へと、看護師たちの志向が向けられるようになっていく。チームのリーダーたちは、管理室のテーブルに早くから座っており、カンファレンスに備えている。この12時半の少し前に、[12]さんは、管理室に入ってきて、断片1のやりとりがなされたわけである。つまり、ここでの「鍵の受け渡し」は、管理室における看護師全体の時間の流れと、病室における1人の看護師と1人の患者との時間の流れとが重ねあわされる結節点になっているのである。

最初に戻って、もう一度、記述同士の関係を、確認しておこう。「依頼」→「応答」という行為の連鎖の下での記述と、「鍵をかりる」という記述は、相互に矛盾しないし、対立もしない。「鍵をかりる」ことは、「緩和ケアにおける投薬治療の準備」である。「薄い記述」があるところに、「厚い記述」を帰属させることができる。さらに、ここでは、「緩和ケアにおける投薬治療の準備」のような「厚い記述」を用いることが、その記述から切り離されたところに「医療」という「文脈」を設定し、それによって説明するというのではない、ということにも注意しておきたい。「依頼」→「応答」という連鎖自体は、医療「においても」医療「を超えても」起こりうる。この点

は、「鍵をかりる」という行為についても同様である。ただし、「オピオイド製剤が保管されている金庫の鍵をリーダー看護師からかりる」は違う。(一つの行為について) 複数の記述が可能である、ということは、それぞれの記述とリフレクシブな文脈が複数記述可能である、ということである。薄い記述があるところに、厚い記述を帰属できるのであり、より広い文脈に置き直して再分析することもできる。そしてそれらは、単純に矛盾したりしない。むしろ、記述同士の関係を示すことによってこそ、「文脈」の関連性(レリヴァンス)を入手できるのである⁽⁹⁾。先に述べたように、こうした考え方は、たとえば「医師(／患者)役割」のような概念を用いて、「医師(／患者)だからこのように行為するのだ」というふうに、記述から切り離された「文脈」によって行為の意味を説明する、という考え方とは、だいぶ違った作業を要求することになる。

エスノメソドロジストたちが主張してきた、それぞれの実践において用いられている方法の固有の適切さを捉えようという問題(「方法の固有の妥当性要請」)⁽¹⁰⁾は、ここで求められている作業をよく特徴づけている。リンチが指摘するとおり、ここで求められているのは、エスノグラフィ的研究の前提として、(たとえば「医療」といった)対象領域について学ぶべきだ、ということだけではないのである[Lynch 1993:302]。「依頼」を行うことも、「鍵をかりる」ことも、医療「においても」医療「を超えても」起こり得る。「緩和ケアの準備を行う」はそうではない。だとしたら、なぜ、「依頼」を行うことが、「緩和ケアの準備を行う」ことでもあり、「病棟内の活動の時間を調整する」ことでもありうるのか、その「方法」を適切に理解できるように示さなければならない。ここで求められているのは、読者がそこに入り込んでいくことのできる「練習課題」を作ることにある。EMの研究成果が、しばしば、チュートリアルとしての性格をもつのは、このためなのである[Garfinkel 2002:池谷2007]。

Ⅲ 「遡及的な再記述」再考

「厚い記述」と「薄い記述」の差異は、カメラではとらえられない、という主題は、他の場所でも形を変えて変奏されている。その一つの例は、ハッキングの著作、『魂を書き換える』[Hacking 1995 (1998)]に見られる。「多重人格症」やその原因としての「児童虐待」の記憶が、新しい概念のもとでいかに記述可能になっていたのかを描いたこの著作において、ハッキングは、G・E・M・アンスコムに言及しつつ、記述のもとでの行為はカメラの映像(画像)には記録されない、と述べている[Hacking 1995:247]。もちろん、ここでもまた、問題なのは、映像(画像)を見る際に私たちが用いることのできる「方法」の方であることに変わりはない⁽¹¹⁾。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、ハッキングのこの問題が、その行為や経験がなされた当時、使用することのできなかつた概念のもとで再記述がなされる問題を扱っている、ということである。そして、ハッキングのあげた事例においては、この新しい概念のもとでの再記述が、複数の記述間での深刻な対立を引き起こしている。3節では、この新しい概念のもとでの遡及的な再記述の問題について再考する。その上で、2節では、複数の記述が対立しない事例を検討したが、3節では、複数の記述が対立するように並置される事例を検討し、そこでの記述と文脈の関係について明らかにしていきたい。

ハッキングのあげた事例は、多重人格症の治療のさいに呼び起こされる痛ましい虐待の光景の記憶に関わるものである。この光景においてなされた30年前の父親の行為(「娘と一緒にシャワー

を浴びた)」を、「児童虐待」という記述のもとで理解するための概念は、当時にはなかったはずである。それに対して、現在においては、より広い文脈のもとで新しい塗料によって再記述された父親の行為は、「児童虐待」として理解できるようになっている。多重人格症の病因論は、多重人格症を引き起こすことになった原因として虐待の経験を指定する。こうした病因論は、過去の虐待の経験と現在の症状とを一つの文脈のもとで理解するための資源として用いられているのである。こうした事情を踏まえて、ハッキングは、(過去の記憶ではなく) 過去における行為それ自体が不確定である、と述べている。

なお、ハッキングのこの著作に対しては、エスノメソドロジストの側からも、いくつかの批判がなされている⁽¹²⁾。その一つである、シャロックとI・ロウダー [Sharrock and Leuder 2002] は、アンスコムによる行為の再記述という考え方から、いたずらに懐疑論的な主張を引き出さないように、注意を促している。シャロックらは、一つの行為について複数の記述がなされるさいに、それらの記述がただちに対立するわけではないと述べ、対立する場合とそうでない場合を区別するように促している。2節で述べたように、「依頼」をするという記述と「鍵をかりる」という記述は、互いに対立するわけではない。それに対し、ハッキングの「児童虐待」をめぐる事例が難しいのは、再記述を行うさいに新しい概念が使用可能になっていることに加え、どの概念を用いて記述するか、実際に対立が起きているからである。

そうした状況において、シャロックらは、過去の行為のその時点での記述と、そののちになされる再記述との、時制の区別を強調する。つまり、「娘と一緒にシャワーを浴びる」という過去の行為のなされた時点での記述と、多重人格症のセラピーの中で語られる「児童虐待」という再記述がなされている時制を区別する。過去の時点で、「児童虐待」という概念がなかったときには、父親は自らの行為を「児童虐待」という記述のもとで意図的にすることはできなかった。しかし、それにもかかわらず、「児童虐待」という概念のもとで遡及的に再記述されるとき、そこには、現在の基準のもとで「児童虐待」という記述をすることによって、(過去の時点でその意図をもてたかどうかにかかわらず) 一つの道徳的判断がなされていることになる。あるいは、過去の時点で自らの行為を「児童虐待」という記述のもとで理解することができなかったとしても、娘が不快な経験をしているのを知りながらあえてそれを行った、ということであるならば、そこでは、その過去の時点においても非難することのできた何らかの意図を帰属させることができた可能性もある。こうした意図の帰属の可能性は、その行為が「児童虐待」であったという、現在における道徳的判断を行いやすくするかもしれない。いずれにせよ、シャロックらの議論が示しているのは、ここに現在における判断の問題があることなのである。

その上でなお、ハッキングの「児童虐待」をめぐる事例が難しいのは、どの概念を用いて再記述するかについて、まさに判断の問題をめぐって、実際に対立が起きているからである。多重人格症の記憶セラピーにおいて、過去に受けた不快な経験の記憶を語り、それを「児童虐待」という新しい概念のもとで再記述していくことは、その経験を引き起こした者を非難することでもある。実際にその非難を受け、告発された被疑者たちは、その記憶が虚偽のものであることを主張する。その行為を行った過去の時点においては、「児童虐待」という記述を使用できなかった以上、その記述のもとで真である(とか偽である)と確定できる条件が、もともとあったわけではない。だからここでの論争は、それぞれの主張の真偽を確定するための条件がないところで空回りしているかのような混乱をみせることになる [浦野2007: 264-265]。多重人格症の病因論に

もとづいて記憶セラピーにおいて再記述される児童虐待の記憶と、その記憶が虚偽であると述べる人びとの主張との対立は、人間の行為についての新しい記述をめぐってなされている。ハッキングの『魂を書き換える』という著作は、記憶を共通の知の対象とするような「記憶の諸科学」が作り上げられたこと、そして、これらの記憶の科学の諸概念のもとで新しい記述が用意され、新たな論理空間が切り開かれてきたことを、明らかにしたものである。

本稿では、このような形で実際に生じている対立については、それ自体一つの現象として記述していく方針を示したい。こうした対立を一つの現象として理解するためには、当時使用することのできなかつた概念で再記述がなされるさいに、その再記述をするという実践そのものが持つてしまう効果についても考えていく必要がある。一方で、「児童虐待」という新しい概念は、そのもとでの新しい行為の機会を可能にするものである。他方で、その新しい概念のもとで再記述を行うことは、この事例においては、過去の虐待の経験と現在の症状とを結びつけて理解する一つの文脈を作り出すことでもある。それに対して、その記憶を虚偽だと訴えることは、一方で、こうした病因論にもとづく文脈化を解除することである。他方で、この事例においては、告発に対する応答としてこの訴えがなされるのであれば、その訴えが行っているのは、並置された複数の記述をはっきりとした対照関係のもとで理解させるような一つの文脈を作り出すことでもある。そして、記憶の科学の諸概念のもとで実際に複数の記述が並置されるならば、それらの記述を一定の対照関係のもとで理解させるような文脈がどのように編成されているのかについても、あわせて考えることができる。新しい概念のもとでの遡及的な再記述の問題は、こうした脱／文脈化の問題として理解することができるだろう。3節では、具体的に新しい概念のもとで過去の再記述がなされる事例をとりあげ、ここでの記述と文脈の関係について例証していきたい。

新しい概念のもとで過去の行為や経験を遡及的に再記述することは、実践の参加者たちにとって重要な問題となることがある。3節では、その事例として、多発性嚢胞腎 (Polycystic kidney disease: 以下 PKD) という病いの当事者たちの参加するフォーカスグループインタビュー (以下 FGI) における語りを取りあげたい [前田2009]⁽¹³⁾。インタビューの場では、現在の時点から過去の時点に遡って編成される経験の語りを聴くことになる。その中には、それ以前との対比において、変化があったことを示す語りが見られる。変化を示す語りは、複数の記述を並置することによってなされることがある。複数の記述が対立するように並置される実践は、複数の参加者の意見が文字通り対立するということがなくても、同じひとりの参加者の経験が再記述され、その新しい記述のもとで更新されていく場合にも生じる。PKD という病いの当事者たちの語りから、そのような事例を紹介したい。

PKDのうち常染色体優性遺伝の形式をもつものを、ADPKD (Autosomal dominant polycystic kidney disease) と呼ぶが、これは成人をすぎてから発症することの多い病いである。1980年代から1990年代にかけて、遺伝子解析がすすみ、原因遺伝子が特定された⁽¹⁴⁾。腎障害が顕在化して病いであることが分かる場合もあるが、検診や他の病気との関連で、まったく自覚症状を伴わない状態で、知識が入ってくることもある。また、とくに過去の事例では、当事者が遺伝性疾患であることを知らないで、単に「腎臓が悪い」という認識で生涯を過ごした人も多かったようである。新しい医学的知識が使用可能になっていくにつれて、病む人たちは、それぞれの仕方その知識を伝えられ、また、痛みや不安を経験しながら、病いの当事者としての経験を積み重ねてゆく。本稿では、新しく告げられる知識がどのように経験され、どのように経験の編成

のあり方を変えていくのか、という点に絞って考察したい。

PKDのような病いの場合、新しい知識は、未だ経験していないことがかんするものとして、伝えられることがある。FGIの参加者の1人Cさんは、自転車事故で救急病院に搬送されたさいに、CTを撮ったら腎臓が腫れていて、それで嚢胞腎とわかった、と述べていた。また、Cさんの夫は、この場で遺伝性疾患であることを告げられ、「治らない」と伝えられたと述べていた。また、PKDの場合には、知識を提供する医療者の説明が、「原因は遺伝である」（過去）、「根治療法がない」（現在）、「いずれは透析に入る」（未来）という時系列に沿った3つの説明を結ぶ形式をとることがある。ある参加者が「青天の霹靂」であると語っていたように、こうした物語は、当事者にとっては、未来が定められたような感覚として感受されることがある。A・フランクは、医学的知識に基づいて作られた物語のもとで自らの経験を理解するようになる傾向が行き過ぎてしまうことを、「語りの譲り渡し」と呼んでいるが [Frank 1995 (2002)]⁽¹⁵⁾、さらに遺伝性疾患に特徴的な点として、医療者から提供される説明は、その人のみの物語ではなく、家族全体と結びつけられていくことがある。提供された知識は、自らの家族をみることによって得られた知識と重ね合わせて理解されることがあるからである。次のdさんの語りは、その象徴的な事例である。

【インタビュー】

d: もう私なんか、40までで透析入るよーって言われて。今×歳なんですけど。で、母が透析入って2年で死んでるんで、え、私の人生42歳で終わりっていう、妙な足し算をしてしまって。やっぱり遺伝病治らない、透析入ったら2年、っていう私の中では固定観念が強かったんで。で、すごくこう、先生としては何気なくポーンと嚢胞の数の多さとか腎臓を動かしてる状態をCT見はって、おっしゃったんだろうけど。

「40までで透析入る」という説明は、「原因は遺伝」「根治療法がない」という時系列に沿った一つの文脈において、理解できるものとして提示されている。しかし、dさんの語りからは、この説明が、「母が透析入って2年で」という過去の経験と結びつけられることによって、「私の人生42歳で終わり」と理解されていることがわかる。この説明が、このような文脈のもとで理解されることは、おそらくこの医師の予期の範囲を超えたものだったのだろう。この伝えられた知識は、それまでの経験の全体を編成しなおすようなしかたで、dさんにとっては重要な意味をもつものとして理解されている。「遺伝性疾患としてのPKD」という新しい概念のもとで再記述を行うことは、この事例においては、母親を看取った過去の経験と医師からつけられた説明とを結びつけて理解する一つの文脈を作り出すことである。おそらく、dさんの母親は、自らが遺伝性疾患であることを知らなかったという意味においては、dさんと同じように「遺伝性疾患」を経験したわけではない。むしろ、dさんの母親の人生は、透析に入った母親の姿を想起し、自らの現在の姿と重ね合わせる実践において、遺伝学的知識に結びついた物語の一部として遡及的に再記述されることで、現在のdさんの人生へと結びつけられているのである。

dさんのこのような理解は、ずっと維持されていたわけではなく、この後、当事者グループに参加していくことなどによって変化していった。当事者グループの場は、もちろん情報を交換する場でもあるわけだが、さらに、自らの経験を語りなおし、語りあうことによって成立している

側面がある。そして、このインタビューの場も同様に、互いに自らの経験を語り、また、その語られた経験に対して、その理解を示していく場として構成されている。ある参加者の言葉を用いれば、「多かれ少なかれ、皆言われていることは一緒なんだ」ということを確認する実践でもある。このような「同じ病いの経験」を一つの軸として行われるメンバーシップの確立は、病む人の経験の位置づけを変えていくことがある。

【インタビュー】

d：そうすると透析後2年っていうことはまずありえないとか、いろいろね、前向きにものすごく考えられるようになったし、同じ病気と同じように苦しんで、こう、患者さん同士集まるってというのは、やっぱりこう、傷を舐めあうんじゃないかって、私はこうやって、私はこんな症状があるとかで。

ここで示されているのは、「私はこう」「私はこんな症状がある」というかたちで、このグループの中に他にさまざまにあるであろう経験の物語の一つとして、症状を語りなおすことによって、病む人自身の経験の位置づけそれ自体が変化していく、ということである。ここでなされているのは、「語りの譲り渡し」のようなかたちでなされた文脈化を解除することであるが、それは、自らの経験を他の「同じ病いの経験」と結びつけて理解する、もう一つの文脈を作り出すことによってなされていることに注意しておきたい。「透析入ったら2年」という記述に対して、「透析後2年っていうことはまずありえない」という記述が並置されるとき、そこでは、自らの経験についての理解の変化を定式化することがなされている。その変化は、前者と相互反映的（リフレクシブ）であった文脈からはなれ、後者と相互反映的（リフレクシブ）な文脈へと移行することによって、成し遂げられている。このような文脈の移行とともに、経験が更新されていく。自らの経験をどのような文脈のもとで理解するか、という問いは、実践の参加者たちにとっての問題でもあるのだ。

また、「同じ病いの経験」を一つの軸として行われるメンバーシップの確立は、病む人の位置づけを変えると同時に、その人を位置づける言葉の側をも変えていくことがある。実際、「遺伝性疾患」の物語を受け入れた上で、自らの物語を語りなおしていくとき、「繋がり」や「伝える」といった言葉が、「同じ病いの経験をしている」メンバーシップの一部として、肯定的に位置づけられていくことがある。実際に、子どもも同じ病いを生きているdさんは、自分の主治医と子どもの主治医との間で「両方繋がっててもらわない」と考えて、「先生、この先生知ってますか？」とたずね、「先生同士」の繋がりを作っていったことを語っている。

【インタビュー】

d：小児と大人は違うかもわからへんけど繋がりがすごく濃くて、同じ病院内で密接に話のしあえるドクター同士が。ただ、先生同士を、私の主治医とこの子の主治医を繋げるのも、一生懸命、先生この先生知ってますか？ って、何かもってて顔写真。こっちには、この先生知ってますか？ って言って。ほんたらどうも学会とかいろいろで顔合わせて、ご存知やって話しなんで、極力話しの中で、自分の先生の時はずいぶん先生の××先生でどうのってという話題をさりげなくこう2、3分は必ず。こっちには△△先生の話さをさりげなく出して。両方繋

がっててもらわないと、やっぱり、繋がってもらってることで、ちょっとしたこうデータの流しあいつことか、ね、こっちにこう情報を知らせるとかやってもらえるかな？ と思って。

ここでみられる、親と子の間で情報を伝えていく実践は、透析に入った母親の姿を想起し自らの姿と重ね合わせるような実践とは、時制の上で非対称な関係にある。dさんは、遺伝学的知識を手にするのできる現在においてこそ、その知識に結びついた物語を超えて、自らの身体に起きていることを、情報として自らの子どもに伝えていくことができる。ある参加者が、病気も「親の生きた一つの証」という表現を用いていたが、まさに「証」が未来へと伝えられていくのである。もちろん、私たちが日常的に用いてる「家族」というカテゴリー集合のもとだけでも、「親から子へ伝える」という行為は、理解可能である。しかし、ここでの「伝える」という活動は、同じ遺伝性疾患を生きる人びとのカテゴリーとも、結びついている。だからこそ、自らの身体に生じた具体的なトラブルとその対処といった経験を語り直すことは、自らの子どもに同様な対処が必要になった場合に役に立つかもしれない情報を「伝えていく」ことでもある。この両者において、「伝える」という表現自体は同じでも、その概念的な位置づけは、重ね書きされる形で少し動いている。後者のような意味で「伝えていく」ことは、一方で、「遺伝性疾患」にかかわる遺伝学的知識と、「同じ病いの経験をしている」という積み重ねの中で培われた理解との双方が重なって、可能になったことである。遺伝学に結びついたさまざまな新しい概念は、そのもとの新しい行為の機会を可能にするものであるが、そのような機会が実際に生じるところには、新しい概念と折り合いをつけていくための「人びとの方法論」があると言ってよい。

注意しておくべきなのは、ここでもまた、どのような記述のもとで行為や経験が理解されるかという問題を、「医療」という文脈や、「医療／日常」といった区別によって説明することがなされているわけではない、ということだ。むしろ、現象は、ずっと複雑である。そもそも「遺伝性疾患」という専門的知識が、その適用範囲を示していくとき、「親／子」という日常的な知識に言及しないですむということはない⁽¹⁶⁾。その新しい知識が働く場所は、現実に家族が生活している場所なのであり、また、家族の関係の作り方にとって、遺伝性疾患をめぐる専門的知識は重要なリソースにもなる⁽¹⁷⁾。方法の固有の妥当性要請の問題は、再びここでも重要な意義をもっている。3節で簡潔に行ったのは、当事者グループにおいて「私はこう」と語り直すことが、なぜ、どのような意味で、「語りの譲り渡し」の文脈から外れていくことであるのか、その「方法」を適切に理解できるように示すことであった。あるいは、「自分の身におきたことを伝える」ということが、なぜ、どのような意味で、「繋がり」を作ることであるのか、その「方法」を適切に理解できるように示すことであった。繰り返しになるが、ここで用いられている「方法」は、「遺伝性疾患」にかかわる遺伝学的知識と、「同じ病いの経験をしている」という積み重ねの中で培われた理解との双方が重なって、可能になったものなのである。

IV 結論

EMは、どのように「文脈」について思考するのか。この問いに対して、最初に、文脈を編成することや、文脈から外れることは、その実践に参加する人たちにとっての問題でもある、と答えておいた。その上で、本稿では、それが実際のところどのようなことなのか、を示してきた。

2節でみたように、「鍵をかしてください」という発話は、「依頼」—「応答」—「感謝」という連鎖において、「依頼」であるのだし、「鍵をかりる」ことは、「病室」→「管理室」→「病室」という移動の過程で、リーダーに声をかけ、鍵を受け取り、麻薬の金庫を開け、投薬の準備をし、といった一連の活動の中に埋め込まれているから、「緩和ケアにおける投薬治療の準備」なのである。ここでなされた一連の記述については、相対的に「厚い／薄い」の区別はあるとしても、互いに矛盾したり、対立したりしているわけではない。複数の記述が可能である、ということは、それぞれの記述とリフレクシブな文脈が複数記述可能である、ということであり、より広い文脈に置き直して再分析することもできる。

もちろん、複数の記述が対立するように並置されることもある。3節でみたように、「透析入ったら2年」という記述に対して、「透析後2年ってことはまずありえない」という記述が並置されるとき、そこでは、自らの経験についての理解の変化を定式化することがなされている。この変化は、母親を看取った過去の経験と医師からつけられた説明とを結びつけて理解していたのに対して、自らの経験を他の「同じ病いの経験」と結びつけて理解する別の文脈を作り出し、前者の文脈から外れていくことによって、成し遂げられていた。このように、自らの経験をどのような文脈のもとで理解するか、という脱／文脈化への問いは、実践の参加者たちにとっての問題でもあるのだ。EMは、こうした実践における「人びとの方法論」を明らかにしていく。こうした研究は、複雑な記述同士の関係のどこからでも始めることができる。同時に、個別の記述の理解可能性を離れて何かを述べることができるわけではない。

本稿で簡単に紹介したような分析の結果は、結論だけとりだしてくれば、あたりまえのこのようにみえるかもしれない。2節で示されたのは、病院における緩和ケアが協働実践として成り立っている、ということだった。1人の看護師が病棟組織を代表するものとして1人の患者に出会えるのも、そうした協働実践にささえられているのだが、これも言われてみればあたりまえの主張であると聴こえるかもしれない。しかし、問題はなぜ、そのことに気づきにくくなってしまったのか、ということの方である。病院組織において看護師がかかえるトラブルが、しばしば個人の問題として処理される構造があることは、繰り返し指摘されてきたし、それに対応するための対策も論じられてきた⁽¹⁸⁾。そのような現状においても、1対1の看護ということだけでなく、協働実践の方法として問題をとらえなおす作業が、十分になされてきた、というわけではないだろう。もちろん看護師たちは、それぞれの実践において、こうした問題を解いているわけであるが、そこでなされていることが必ずしも気づきやすいことばかりではない。だからこそ、2節で紹介した病院の看護部の活動目標の1つは、「見える看護」になっている。EM的なワークの研究の成果は、その意味で、ワークプレイスでの実践をもう一度想起させるものとなっている。

あるいは、新しい医学的知識が、人びとの行為や経験の理解の可能性を変えていく、ということも、ありふれた主張であると聴こえるかもしれない。実際に、社会学において、再帰的近代化論やリスク社会論として繰り返し述べられてきたことと重なることもあるだろう。注意しておきたいのは、3節で示されたのは、新しい遺伝学的知識によって可能になった経験は、当事者にとって、少なくとも最初は、自らの決定に帰属させることのできる「リスク」というよりは、「青天の霹靂」のように突然降りかかってくる「危険」[Luhmann 1991 (1993)]として理解されている、ということであった。一方で、病いとその人の意志によらず降りかかるものである以上、どこまでいっても「危険」として被るしかない側面は残り続けるわけだが、他方で、新しい遺伝学的知

識は、「リスク」に対応するための新しい行為の機会を作り出していかかもしれない。ただしそれは、未来に起こりうることがらが、どの程度まで、特定の決定に帰属されうるものなのか、人びとが新しい知識と折り合いをつけていく実践の結果として生じることなのである。あらかじめ普遍化された形でリスクを問うことは、こうした帰属の実践を見落とすことにつながってしまう⁽¹⁹⁾。こうした折り合いをつけていく実践において、「伝えていくこと」がどのように可能になっているのかを明らかにする作業は、ここでもまた、気づきにくくなってしまふものを、もう一度想起できるようにすることなのである。方法の妥当性は、現象の側が強いてくるものだ⁽²⁰⁾。同時に、その方法を用いることの意義も、少なくともその一部は、現象の側から受け取っているのである。

謝辞

一人ひとりお名前をあげることはできませんが、本稿のもとになった調査にご協力してくださったみなさまに、心より感謝申し上げます。

注

- (1) サックスの「社会学的記述」については、前田 [2007a, 2008] においても紹介したので、参照して欲しい。また、前田 [2007a] では、行為の記述の難しさが際立つ例として、沢木耕太郎のルポルタージュ [沢木 1980] で記述された例をあげている。こちらも、参照して欲しい。
- (2) サックスによる子どもの語る物語の分析は、物語が語られ編成される実践を記述しようとするものである。物語の編成のあり方という点では、二つ以上の出来事を順序づけているとわかるように編成されていることと、それが適切な語り初め (beginning) と結末 (ending) がわかるように編成されていることが、着目すべき特徴づけになる [Sacks 1972]。
- (3) 「可能な記述」のもとでの出来事を、さまざまな仕方で「見たり」「気づいたり」「観察したり」「見抜いたり」することがあるとしても、それぞれの個別的な事例は、それが実践の編成に即して記述されている限り、「可能な記述」がなされるさいに用いられていた規範的期待から「秩序だったあり方で派生したもの」[Coulter 1983] と理解することができるはずである。
- (4) リフレクシヴィティ概念をめぐって M・ボルナー [Pollner 1991] が引き起こした論争については、リンチ [Lynch 1993 (2012), 2000] および皆川満寿美 [1999] を参照。なお、リンチの主張するリフレクシヴィティについての理解が、EM において標準的なものであること自体は、この論争のさなかにおいてさえ、疑いのないものであったと考えられる。むしろ、ボルナーが、ラディカル・リフレクシヴィティという概念で提示しようとした論点は、EM 内在的なものであったというよりは、EM から離れ (構築主義と親和的傾向をもつ) 社会学の一部に根強くある自己反省性の問題系へ復帰しようとする動きとして理解したほうが、実情に近いだろう。社会学全体を巻き込んだリフレクシヴィティ概念の整理については、中河伸俊 [2004] も参照。中河は、「折り返す／折り返さない」といった独特の区別を用いて、前者に、A・グールドナー、P・ブルデュー、A・ギデンズを、後者に、ガーフィンケルとルーマンを割り振っている。また、中河のこの論文は、こうした反省性の問題系が、しばしば経験的調査可能性に対して疎外的に働いてしまうことを指摘し、経験的調査可能性にこだわった構築主義のあり方を打ち出した論考としても、重要である。
- (5) ウイトゲンシュタインとエスノメソドロジーの関係については、リンチ [Lynch 1993 (2012)] の第5章、および前田 [2008, 2011] を参照。

- (6) ライルの「厚い記述」という考え方と、ビデオを用いた分析の両立可能性を探る試みとしては、他に、海老田大五郎による博士論文〔海老田2012〕がある。
- (7) 2節における事例の記述は、前田・西村〔2012〕のごく一部を概略的に紹介するものであり、詳細は、そちらを参照して欲しい。なお、トランスクリプト断片に関しては、本稿に採用する段階で、分析の内容上問題のない範囲で、再分析用に書きおこしなおした箇所があることをお断りしておく。この論文のもとになった調査は、科学研究費補助金基盤研究(C)「急性期医療の看護場面における実践知の記述的研究」〔代表者：西村ユミ〕の助成を受けて、西村、前田の2名によって行われた。その成果の一部は、他に、前田〔2013〕、前田・西村〔2010, 2012〕や西村〔2014〕、西村・前田〔2011, 2012, 2014〕などとして、発表されている。
- (8) 身体の半身をひねることによって、複数の行為の流れへと関与を示す方法については、シュゲロフ〔Schegloff 1998〕を参照。
- (9) 文脈という概念についてシュゲロフが述べていたように、特定の「場面」や「属性」にもとづく説明は、その関連性(レリヴァンス)が示されず、外在的な文脈に基づく特徴付にとどまる限り、可能な記述という点で等価のものでありつづけるが、一方でレリヴァンスが示されるのであれば、文脈の「外在性」は消失することになる。その上で、シュゲロフは、C・グッドウィンが別のどこで行った分析をより広い文脈におき直してみせて、両者の分析が相互に排他的でもなく、矛盾もしないことを示している〔Schegloff 1992〕。
- (10) 「方法の固有の妥当性要請」については、リンチ〔Lynch 1993 (2012)〕の他に、ガーフィンケルとL・ウィーダー〔Garfinkel and Wieder 1992〕、ガーフィンケル〔Garfinkel 2002〕、池谷のぞみ〔2007〕を参照。
- (11) ハッキングのこの論点については、石井幸夫〔2013〕も参照。また、映像(画像)の持つ理解可能性、複数の記述同士の関係に着目して分析したものとして、L・ジェイユシの論考〔Jayyusi 1991〕を参照。また、映像の理解可能性の分析については、前田〔2007b〕による整理も参照。
- (12) History of the Human Sciences 誌での Review Symposium on Ian Hacking に寄せられたリンチによる書評〔Lynch 1995〕や、ハッキング自身による自己批評〔Hacking 1997〕、および、シャロックらによる書評〔Sharrock and Leuder 1999〕などを参照。3節で紹介するシャロックらによる批判は、やはり History of the Human Sciences 誌上にて展開されたものだが、この批判を皮切りに同誌上で一連の論争がなされたので、詳細はそちらも参照して欲しい(〔Sharrock and Leuder 2002, 2003; Leuder and Sharrock 2003; Hacking 2003〕など)。また、Economy and Society 誌上に掲載された、ハッキングの2冊の書物〔Hacking 1998, 1999 (2006)〕を対象とした書評〔Lynch 2001b〕と、それに対するハッキングの応答〔Hacking 2004〕も参照。
- (13) 3節における事例の記述は、前田〔2009〕の一部を概略的に紹介するものであり、詳細はそちらを参照して欲しい。この論文のもとになった調査は、科学技術振興調整費「臨床コミュニケーションモデルの開発と実践」〔代表者：鷺田清一〕の助成を受けて溝口満子、守田美奈子、西村ユミとともに、2003年に行われた。その後、前田〔2009〕の方向性を継承した研究が、科学研究費補助金基盤研究(C)「遺伝学的知識と病いの語りに関する概念分析的研究」(研究課題番号25380700)〔代表者：前田泰樹〕として継続的に行われており、本稿は、その成果の一部である。継続研究である、前田〔2015〕も参照して欲しい。
- (14) 多発性嚢胞腎については、東原英二監修〔東原2006〕を参照。常染色体優性多発性嚢胞腎(ADPKD)遺伝子は第16番染色体上に位置すると発表されたのが1985年であり、その後1994年にPKD1遺伝子が同定されるにいたった。また、1988年には、ADPKDの原因遺伝子は第16番染色体以外にも存在することが明らかにされ、1993年には、PKD2遺伝子が第4番染色体上に局在することが報告され、1996年には、PKD2遺伝子が同定された。多発性嚢胞腎には、他に、常染色体劣性多発性嚢胞腎(ARPKD)がある。

- (15) フランクは、「物語 (story) を人々が語る実際の話を目指すものとして用い、多様な個別の物語を包摂する一般的な構造を論ずる際には、語り (narrative) を用いるように努めた」と述べた上で、「語りは個々の物語の中にしか存在しえないものであり、したがって区分を保ち続けることは困難である」と続けている [Frank 1995 : 188 (2002 : 313)]。物語や語りをめぐる概念の用法は、複雑に錯綜しており、この区別が、それらを包摂するわけではない。たとえば、伊藤智樹は、「ナラティブ」と「ストーリー」の位置づけについて、論者によって逆にとられかねないくらい異なっている場合があると指摘している [伊藤2013]。本稿では、「語りの譲り渡し」のような語法が、物語が語られ編成される実践に根ざしていることを確認しておくことが重要である。注2も参照。
- (16) 科学的知識の理解可能性が日常的知識の用法に根ざしていることを明らかにしたものとしては、浦野茂による「人種」概念の研究 [浦野2009] を参照。
- (17) 北米のハンチントン病をめぐるサポートグループの活動において、「遺伝性疾患」であるハンチントン病を「家族性疾患 (家族病) (family disease)」として再定義することにつながっていった経緯については、額賀淑郎を参照 [額賀2007 : 231-6]。
- (18) たとえば、P・スミスによる指摘 [Smith 1992 (2000)] などを参照。A・ホックシールドの感情労働論に根ざした調査研究は、看護師が患者の感情を適切に扱うことが困難となる状況について、感情労働の困難という観点から明らかにした。たとえば、訓練プログラムを受ける可能性が十分でないために、個人資質に基づいた自己管理が強く望まれる場合があること。厳しい感情労働が、ヒエラルキーの底辺にいる看護学生に集中してしまう構造があること。同僚のサポートが得られないことが、困難な状況に拍車をかける場合、燃え尽きが起こりやすいこと。そして、これらの困難に共通することとして、その困難の理由は、特定の個人に帰責されやすいということ。これらのことが明らかにされ、またそれらに対する対策が考えられてきた。
- (19) U・ベックやギデンズの議論は、新しい専門的知識のもとで経験されるリスクの問題を扱っていると言える [Beck 1986 (1998) ; Giddens 1990 (1993), 1991 (2005)]。ギデンズによって、モダニティの制度的再帰性 (リフレクシビリティ) は、新しい知識を行為の環境へと組み込むことによって、行為の環境が再組織化されていくこととして、特徴づけられている。なお、ここでの制度的再帰性 (リフレクシビリティ) 概念は、ギデンズ自身によってもあらゆる行為に内属するような再帰的モニタリングと区別されているなど、あくまでもモダニティに特徴的な現象を名指すためのものである。その意味では、ギデンズ自身の (特に初期の) 社会理論において、EM 由来のアイデアからの影響がみられるのも確かであるが、ここでの再帰性 (リフレクシビリティ) 概念は、あらゆる場面で想定される EM 的な相互反映性 (リフレクシビリティ) 概念からも、明確に区別されるかたちで定式化されている。ギデンズの世界理論において、リスク概念は、この意味での制度的再帰性 (リフレクシビリティ) 概念の観点から、未来の植民地化の手段と結びつけて位置づけられている。他方で、本稿であつかった「病い」のような経験は、日常生活から隔離されていくものとして位置づけられている。このようなギデンズの世界理論が、他の多くの社会学者の思考を促したことは疑いがないだろうが、他方で、ギデンズの立論においては、ルーマンの「リスク/危険」の区別が、帰属の実践に目を向けさせるものであることを、十分に捉えきれていないように思う。小松丈晃が指摘しているように、ギデンズは、行為を行わないことこそリスクである、といった主旨の批判をルーマンに対して行っているが、そもそも何も行わないことも一つの「決定」として「帰属」される可能性がある [小松2003 : 33]。したがって、何が「リスク」であり、何が「危険」であるかは、帰属の実践から切り離して決められることではない。本稿でルーマンのアイデアを借用しながら行ったのは、この帰属の実践のあり方を、EM 的に記述することである。

(20) この論点については、前田 [2012] も参照。

参照文献

Beck, U.

1986 (1998) *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*. Suhrkamp Verlag. (『危険社会：新しい近代への道』東廉、伊藤美登里訳、法政大学出版局。)

Coulter, J.

1983 Contingent and *a priori* Structures in Sequential Analysis. *Human Studies* 6 (4) : 361-376.

Coulter, J. and E. D. Parsons

1991 The Praxiology of Perception: Visual Orientations and Practical Action. *Inquiry* 33 : 251-72.

海老田 大五朗

2012「柔道整復師と患者の相互行為」、成城大学文学研究科博士学位申請論文。

Frank, A.W.

1995 (2002) *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*. The University of Chicago Press. (『傷ついた物語の語り手：身体・病い・倫理』鈴木智之訳、ゆみる出版。)

Garfinkel, H.

1967 *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.

2002 *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*. Edited and Introduced by Anne Rawls. Rowman & Littlefield.

Garfinkel, H. and H. Sacks

1970 On Formal Structures of Practical Actions. In *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*. J. Mckinney and E. Tiryakian (eds.), pp. 337-66. Appleton Century Crofts.

Garfinkel, H. and L. Wieder

1992 Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis. In *Text in Context: Contributions to Ethnomethodology*. G. Watson, and R. M. Seiler (eds.), pp. 175-206. Sage.

Geertz, C.

1973/1993 (1987) Thick Description: Toward an Interpretive Theory of Culture. In *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, pp. 3-30. Fontana Press. (『厚い記述：文化の解釈学的理論をめざして』、『文化の解釈学 I』吉田禎吾、柳川啓一、中牧弘允、板橋作美訳、pp. 3-56、岩波書店。)

Giddens, A.

1990 (1993) *The Consequences of Modernity*. Stanford University Press. (『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』松尾精文、小幡正敏訳、而立書房。)

1991 (2005) *Modernity and Self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity Press. (『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳、ハーベスト社。)

Hacking, I.

1995 (1998) *Rewriting the Soul: Multiple Personality and The Sciences of Memory*. Princeton University Press. (『記憶を書きかえる：多重人格と心のメカニズム』北沢格訳、早川書房。)

1997 Taking Bad Arguments Seriously: Ian Hacking on Psychopathology and Social Construction. In *The*

- London Review of Books* 19 (16) (21 August) : 14-6.
- 1998 *Mad Travelers: Reflection on the Reality of Transient Mental Illnesses*. Harvard University Press.
- 1999 (2006) *The Social Construction of What?* Harvard University Press. (『何が社会的に構成されるのか』出口康夫、久米暁訳、岩波書店。)
- 2003 Indeterminacy in the Past: on the Recent Discussion of Chapter 17 of *Rewriting the Soul*. *History of the Human Sciences* 16 (2) : 117-24.
- 2004 Between Michel Foucault and Erving Goffman. *Economy and Society* 33 (3) : 277-302.
- 東原 英二 (監修)
- 2006 『多発性嚢胞腎の全て』、インターメディカ。
- 池谷 のぞみ
- 2007 「小論: EMにおける実践理解の意味とその先にあるもの」、『エスノメソドロジー: 人びとの実践から学ぶ』前田泰樹、水川喜文、岡田光弘 (編)、pp. 248-57、新曜社。
- 石井 幸夫
- 2013 「種のないまなこ: ハッキングの歴史的存在論について」、『方法としての構築主義』中河伸俊、赤川学 (編)、pp. 195-215、勁草書房。
- 伊藤 智樹
- 2013 「ピア・サポートの社会学に向けて」、『ピア・サポートの社会学: ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』伊藤智樹 (編)、pp. 1-32、晃洋書房。
- Jayyusi, L.
- 1991 The Reflexive Nexus: Photo-practice and Natural History. In *Continuum* 6 (2) : 25-52.
- 小松 丈晃
- 2003 『リスク論のルーマン』、勁草書房。
- Leudar, I. and W. Sharrock
- 2003 Changing the Past? *History of the Human Sciences* 16 (3) : 105-21.
- Luhmann, N.
- 1991 (1993) *Soziologie des Riskos*. Walter de Gruyter. (Translated by R. Barrett, *Risk: A Sociological Theory*. Walter de Gruyter.)
- Lynch, M.
- 1993 (2012) *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*. Cambridge University Press. (『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』水川喜文、中村和生監訳、勁草書房。)
- 1995 Narrative Hooks and Paper Trails: The Writing of Memory (in Review Symposium on Ian Hacking). *History of the Human Sciences* 8 (4) : 118-130.
- 2000 Against reflexivity as an academic virtue and source of privileged Knowledge. *Theory, Culture, and Society* 17 (3) : 27-53.
- 2001a (2001) Ethnomethodology and the Logic of Practice. In *The Practice Turn in Contemporary Theory*. T. R. Schatzki, K. Knorr Cetina and E. von Savigny (eds.), pp. 131-48. Routledge. (『エスノメソドロジーと実践の論理』、『社会学理論の<可能性>を読む』椎野信雄訳、情況出版編集部 (編)、情況出版。)
- 2001b The Contingencies of Social Construction. *Economy and Society* 30 (2) : 240-55.

前田 泰樹

- 2007a 「社会学的記述」、『エスノメソドロジー：人びとの実践から学ぶ』前田泰樹、水川喜文、岡田光弘（編）、pp. 38-44、新曜社。
- 2007b 「見る」、『エスノメソドロジー：人びとの実践から学ぶ』前田泰樹、水川喜文、岡田光弘（編）、pp. 210-6、新曜社。
- 2008 『心の文法：医療実践の社会学』、新曜社。
- 2009 「遺伝学的知識と病いの語り：メンバーシップ・テグリー化の実践」、『概念分析の社会学：社会的経験と人間の科学』酒井泰斗、浦野茂、前田泰樹、中村和生（編）、pp. 41-69、ナカニシヤ出版。
- 2011 「『痛み』の文法：ワイトゲンシュタインとエスノメソドロジー」、『ワイトゲンシュタイン：没後60年、ほんとうに哲学をするために』、pp. 141-6、河出書房新社。
- 2012 「経験の編成を記述する」、『看護研究』45（4）：311-23。
- 2013 「急変に対応する：看護ケアのエスノメソドロジー」、『現代思想』41（11）：191-203。
- 2015 「物語を語り直す：遺伝子疾患としての多発性嚢胞腎」、『N：ナラティブとケア』6：84-91。

前田 泰樹・西村 ユミ

- 2010 「『メンバーの測定装置』としての『痛みスケール』：急性期看護場面のワークの研究」、『東海大学総合教育センター紀要』30：41-58。
- 2012 「協働実践としての緩和ケア：急性期看護場面のワークの研究」、『質的心理学研究』11：7-25。

皆川 満寿美

- 1999 「ラディカル・リフレクシヴィティとエスノメソドロジー」、『ソシオロジスト』、武蔵大学1：125-48。

南出 和余・秋谷 直矩

- 2013 『フィールドワークと映像実践：研究のためのビデオ撮影入門』、ハーベスト社。

中河 伸俊

- 2004 「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」、『社会学評論』55（3）：4-59。

西村 ユミ

- 2001 『語りかける身体：看護ケアの現象学』、ゆみる出版。
- 2014 『看護師たちの現象学：協働実践の現場から』、青土社。

西村 ユミ・前田 泰樹

- 2011 「『痛み』の理解はいかに実践されるか？：急性期看護場面の現象学的記述」、『看護研究』44（1）：63-75。
- 2012 「時間経験と協働実践の編成：急性期病棟の看護に注目して」、『看護研究』45（4）：388-399。
- 2014 「病院全体のバランスを見る」、『看護研究』47（7）：679-690。

額賀 淑郎

- 2007 「北米と日本における『新医療複合体』」、『遺伝子研究と社会：生命倫理の実証的アプローチ』山中浩司、額賀淑郎（編）、pp. 217-41、昭和堂。

Pollner, M.

- 1991 Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity. *American Sociological Review* 56（3）：370-80.

Ryle, G.

- 1966-7→1971a/2009a The Thinking of Reflecting. In *Collected Papers* vol. 2, pp. 479-493. Routledge.

- 1968→1971b/2009b The Thinking of Thoughts: What is 'Le Penseur' Doing?' In *Collected Papers* vol. 2, pp. 494-510. Routledge.
- Sacks, H.
- 1963 Sociological Description. *Berkeley Journal of Sociology* 8: 1-16. Reprinted in: 1990 *Ethnomethodological Sociology*. J. Coulter (ed.), pp. 85-95. Edward Elgaer.
- 1972 On the Analyzability of Stories by Children. In *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*. J. J. Gumperz and D. Hymes (eds.), pp. 329-45. Holt, Reinhart & Winston.
- 1992 *Lectures on Conversation 1&2*. Edited by Gail Jefferson: with Introductions by Emanuel A. Schegloff. Basil Blackwell.
- 沢木 耕太郎
- 1980 「おばあさんが死んだ」、『人の砂漠』、pp. 7-58、新潮社。
- Schegloff, E. A.
- 1992 In Another Context. In *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. A. Duranti and C. Goodwin (eds.), pp. 191-228. Cambridge University Press.
- 1998 Body Torque. *Social Research* 65 (3) : 535-596.
- Sharrock, W.
- 2011 The Project as an Organizational Environment for the Division of Labour. In *Ethnomethodology at Work*. M. Rouncefield and P. Tolmie (eds.) , pp. 19-35. Ashgate.
- Sharrock, W. and B. Anderson
- 1991 Social Actor: Social Action in Real Time. In *Ethnomethodology and the Human Science*. G. Button (ed.), pp. 137-75. Cambridge University Press.
- Sharrock, W. and I. Leuder
- 1999 Essay Review: Multiplying the Multiplicity: Are Dissociative Identity Disorders 'real'? *British Journal of Psychology* 90: 451-5.
- 2002 Indeterminacy in the Past? *History of the Human Sciences* 15 (3) : 95-115.
- 2003 The Indeterminacy of the Past. *History of the Human Sciences* 16 (2) : 101-15.
- Smith, P.
- 1992 (2000) *The Emotional Labour of Nursing: Its Impact on Interpersonal Relations, Management and the Educational Environment in Nursing*. Macmillan. (『感情労働としての看護』 武井麻子、前田泰樹監訳、ゆみる出版)
- サッチマン, L.
- 1994 「日常活動の構造化 (The Structuring everyday activity)」、『認知科学の発展 vol. 7 特集分散認知』 土屋孝文訳、日本認知科学会 (編)、pp. 41-57、講談社。
- 浦野 茂
- 2007 「記憶の科学：イアン・ハッキングの『歴史的存在論』を手がかりに」、『哲学』 117 : 245-66。
- 2009 「類型から集団へ：人種をめぐる社会と科学」、『概念分析の社会学：社会的経験と人間の科学』 酒井泰斗、浦野茂、前田泰樹、中村和生 (編)、pp. 10-40、ナカニシヤ出版。

(東海大学総合教育センター准教授)